

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主席 研究員



19 縮小する社会と地方都市の将来像

読者も周知のとおり、長野県は全国屈指の長寿県（男性81・75歳、女87・67歳）であり、中でも松本市にあっては単に長寿にとらわれず、さらなる上位目標として『健康寿命の増進、延伸』を旗印に市民・行政が一体となった健康に取り組む全国でも先駆的存在の都市である。

健康寿命とは、その言葉のとおり「健康上の問題で日常生活が制限されることなく、自立して生活できる期間」を指す。現状では、男性が約9年、女性にいたっては約12年を平均寿命から差し引いた年令が生涯健康寿命と

いわれている（厚労省指針）。松本市の場合、都市特性評価のランキングにおいても、それに取り組む姿勢への評価が他の都市に比べ傑出したポイントをもたらし、ここの一つの地方都市の目指すべき方向性が見える。

高齢化社会を迎えたいま、人々は物量に満ちた（物質的満足）社会以上に、心の充足感を求める時代にシフトしつつある。そしてそのきっかけを与えてくれたのは東日本大震災といわれる。身の丈に合った暮らしや生活に潤いを与えてくれる価値観が求められるようになった背景には、一瞬にしてすべてを失う辛い光景を目の当たりにしたこと、ささやかな日々の暮らしを慈しむ価値感の変化が人々の心に芽生えたものと筆者は考える。

人生を慈しみ、謳歌することは、けっして物欲を満たすことで得られるものではなく、それは幸福を身体いっぱいと感じ、染みわたるような感性への欲求である。人々の住み暮らすまちがそれをどこまで充たしてくれるか、また、それをどの

ように具現化し造形してくれるのか、これが近未来の地方都市のあるべき方向性なのであり、『景観まちづくり』の意義であり、魅力でもある。そして、ここに人々は愛着が生み、誇りを持つようになるのである。

長野市における景観まちづくりも徐々にその形を表わしつつある。松本市はもとより、上田市においても中心市街地の若手経営者らによるシンポジウムも盛んに行われるようになった。

筆者の考える景観まちづくりの根幹をなすものは、先に述べたような人々の幸福感への欲求や追求が心理的基軸だとすれば、その具体化した例の一つは『街並（まちなみ）』に他ならないと思う。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商會役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在、同研究所社長。